
片羽の蝶々

木気 綾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

片羽の蝶々

【Nコード】

N12890

【作者名】

木気 綾

【あらすじ】

諦めた瞳を持ちながら、気丈に振る舞う十九歳の瑞樹^{みずき}。彼女を慕い、愛し、（ちょっと逆ハー気味に）集まる人々。彼女から祝福のキスを受け、最後に選ばれるのは――？ あなたなら、どのヒトをえらぶ？

舞う、光とともに

人は学ぶ生き物なのである。

自ずから学ぼうとしていく生き物なのである。

これは、はるか彼方より刻まれた記憶により鮮明なる事実となっている。

そう赤ちゃんが無垢だということのように、司祭が無欲だということのように。

それはそれは疑う余地もなく、ただ真実であるように語られる：

……

しかし、それは永久不変の真実なのだろうか。

人間はいつだって欲望にまみれて、まみれて、汚くなっていく。
信じられないくらいにどん欲に己が欲をただただ満たすだけの人
だって、存在するのだ。

もし、もし。

その“不変”とさえ思われていたモノが、実はそうでなかったら。
あなたは一体どうするのか。

神は万人を救う。

その定義とも言える“真実”を信じることが出来なくなったとき。
いや、信じられないほどの出来事が身に降り掛かってきたとき。
一体どうして人は悲しまずにいれるのだろうか。

それが可能なら、だれか。

お願いだから、どうか、私に教えて。

神山 こうやま 壺 いち。

音楽に携わる人の中で、はたしてどれだけの人がこの名前を知らないでしょうか。百人に神山 壺を知っているかと問えば恐らく九十八人は「もちろん」と答えるでしょう。

その「もちろん」と答えた人の中で彼の経歴を詳しく知る者はおそらく一握りにも満たないでしょうが、しかし、彼の名前は世界中の人の知る所なのです。

よく経歴は知らない。けれどなんだか音楽のすごい人。
それが多くの人々の見解です。

ここにそれを払拭するために彼の経歴を述べることにしましょう。
神山 壺。1970年生まれ、現在四十歳。

父親は不動産業を営み、母は専業主婦。彼の父親は広い人脈持っていて、その幅は限りなく広いものだった。

彼は母親の影響でクラシック音楽に興味を持ち始め、三歳からピアノ、バイオリンを習い始める。しかしそれでは飽き足りず指揮も父親の知人だった榊 茂夫に学ぶ。進学は榊 茂夫が教授を務める高原音楽大学短期大学に指揮科専攻で入学。

卒業後に渡仏、二十四歳で国際指揮者コンクール優勝、さらに当時クラシック界を牽引していたフェルナンド・モンレグレに師事。彼の名を冠したコンクールでも一位。さらなる高みを目指すため、帝王と呼ばれたマーク・フォン・バーンスタインに師事。ヨーロッパ各地で客演を多数つとめました。

二十代後半にはニューヨークフィルの常任指揮者となり、三十二歳にはそのとき最も輝いている指揮者が選ばれるというウィーン・

フィルハーモニー管弦楽団のニューイヤークンサートの指揮もつとめました。そのときのCDは世界で一千万枚を売り上げる異例のセールスを記録し、今なおその記録は伸びつづけています。

日本が世界に誇る、芸術家。

それが神山 壺なのです。

その一方、あまり知られていませんが彼はとても情熱的なのです。短大卒業と同時に結婚し、翌年には一児の父となっています。現在はおふたりのお子さんが居て……――

ぶつり。

そこで嬉々として神山 壺のプロフィールを読み上げるラジオのDJの声は途切れた。ひとりのある女がラジオの電源を消したのだ。彼女のよく知る神山 壺の経歴を今更語られても何の感慨も起きないし、むしろ邪魔なだけだ。本当によく知っているから。そう、嫌になるくらいに。

このラジオの電源を消した女性。名前を瑞樹という。

白い室内、ガラス張りの窓の近くにテーブルセットが配置してある。そこでコーヒを飲みながら適当に雑誌をめくっている彼女はとても暇そうに見える。

この関東近郊にあるこの街に彼女は休みをとりに来ていたのだが、彼女にとってこんなに暇なことはいままでの人生にないくらいに珍しいものだった。

そっと、雑誌を閉じてコーヒを飲み干す。そして椅子から立った。

ファーストにカーキのマキシドレスを着る彼女は顔もスタイルも、まるで日本人には見えない。日本人ではない、と言われた方がおおよそしっくりくるのだがなんといわれようが彼女は正真正銘日本人なのだ。

室内なのに七センチはあろうかというヒールのショートブーツをかつかつと鳴らし、彼女が向かったのはグランドピアノの前。その穏やかな表情に合う滑らかな旋律、シヨパン。決して難しくないその曲、けれど魅力が無いわけではない。

そつと、曲を弾き終えた彼女は息を吐いた。

彼女の耳は稀とも言える才能にあふれてる。

一度聞いた曲はそのまま再現でき、忘れない。彼女には楽譜が必要ないのだ。それだけでも驚くべきことだが、そこにピアノと音楽の才能が伴っている彼女は、神の子と呼ばれた。

——音楽の神に愛された子。

そう呼ばれるは、もはや必然としか言いようがなかった。

「姉貴。そろそろ」

「ああ、灼^{あつた}！ わかったよ。今行く」

瑞樹のことを姉貴と呼ぶのは、正真正銘彼女の弟、灼。

となりに並んで兄弟だと言われればうなづく他に無いくらいに似ている。すらりとした体躯、その瞳のオリーブ色。彼らはそう、フランス人と日本人のハーフなのだ。

瑞樹の手には彼女には必要のない譜面の入ったバッグが、灼の手

にはバイオリンのケースがそれぞれ握られている。行こうと灼が言い、瑞樹がうなづく。

そんな彼らは知らない。

——短大卒業と同時に結婚し、翌年には一児の父となっています。現在は男女のふたりのお子さんが居て、長男の灼さんが十八歳だそうです。灼さんは現在音楽を学んでおられて、すでに出場すればコンクールで優秀な成績を修めるほどの腕前とか。将来が楽しみな日本のホープですね。さてそれでは曲に……

瑞樹が切ったラジオのDJが続きでそんなことを言っていた、なんて。

舞う、光とともに（後書き）

音楽が題材です。

未熟ですので用語等間違いがありましたらご指摘お願いします！！

出る杭は打たれる

瑞樹、そして殊更^{あらた}灼は天才だった。

瑞樹は神から授けられたと言われる天才的な音楽センスとその聴力。幼いころから音楽の神に愛された子、モーツアルトの再来とまで言われた。

そして弟の灼はさらにその上をいった。

灼という名前どおりにはつきりとして鮮やか、原石のように強い音。バイオリニスト、いやソリストとしての十分すぎる才能を持っていた。

小さな頃からふたりの姉弟は互いに高め合い、補い合った。

そして瑞樹が八歳の頃。それまでは世界を飛び回っていたけれど、アメリカに定住をはじめ。様々なものに触れる機会に恵まれた瑞樹と灼はそれぞれに才能をのばして行った。

ところが突然、瑞樹は経済学を学びたいと言って音楽活動をやめてしまった。それは瑞樹が十四歳、灼が十三歳のときだった。灼は勉強に興味は一寸も無く姉の行動を不思議そうに眺めていたが、そんなことは瑞樹の知ったことではなかったのだ。

やがて十四歳にして第一線から退いた瑞樹は世間から忘れられさられて行く。

音楽の愛娘^{めぐし}は、音楽から切り離されればただの娘だ。

もちろん瑞樹自身、学業の傍ら時間があればピアノに向き合ったがそれは今までからすれば無きに等しいほどの時間しかなかった。いままで朝起きてから夜寝るまで、飽きることなくピアノを弾いて、時には母親から心配されるほどだったものが。突然、数日に一回、それも一、二時間触る程度まで減ったのだ。けれど家族はなにも言わなかったし、瑞樹もそれでいいと思っていた。

———そんな生活が四年。

瑞樹は一足飛びどころか二足、三足とぼしてアイビーリーグのひとつである名門大学を卒業した。四年間、忙しくて目が回るようだったけれどそれでも瑞樹は満ち足りた時間を味わったのだった。

そして日本にやってくる。

小さく古い一軒家を借り受けてまた音楽に専念するために。一年間、必死で鈍った指を働かせた。ひとりでは挫けてしまいそうな環境も、ひとりではなかったから耐えられた。瑞樹が日本にいることをきいた灼が後を追うように日本にやってきたから。

なぜそんなに頑張るのか、と聞かれれば理由はみつあった。

ひとつ、灼と約束したから。

———日本で一緒に音楽をやろう、と。

ふたつ、自分を評価してほしかったから。

——— 神山 壺の娘としてでなく、ただの瑞樹として。

みつつ、ある人に言われたから。

——— 才能のある人はそれを埋もれさせるだけで罪なんだ。

君にはその才能があるんだから、それを開花させなくちゃならないんだ。

そして、今日。

瑞樹にとっても、灼にとっても、待ちに待った日なのだ。

借りていた家を引き払い、一週間前に大学近くのマンションに越してきたのだ。灼は出席したが、瑞樹は事情により入学式は出席しなかった。だから瑞樹と灼にとって今日という日はなによりも大切な日に思えたのだ。

彼らが通うのは父親も通っていた大学。

日本においてこの大学以上の音楽教育を受けられるところはまず無い。そう言いきって差し支えない。それが——— 高原大学なのだ。

ここでの瑞樹の名前は Mizuki Dupont.

母の姓を名乗ることは切符。自分の正当な評価を受けるための、切符。

灼はといえば名前こそ音楽好きは知っているものの、顔までは公開されていないのでそこから素性に気づかれることはない。そもそも基本的に神山 壺はプライベートは非公開だから、彼の配偶者がどういう人だということを知る人も少なければ、その名前、今どこに住んでいるのかなんて知ることはできないのである。

知っているのは壺の昔からの友人、それに本当に親しい仲間の一

部なのである。そんな人たちが暴露するとは思えないし、なによりするはずも無い。

「ここが高原か」

「広いね、さすがに」

都会の喧噪からはすこし外れた場所に立つこの大学。

しかしことさら不便というわけではない。駅からは遠いが大学がバスを出しているし、学内にコンビニや小さなスーパーもある。学内にある寮に住んでいる人も不便を感じたことはおそらくないだろう。

練習棟なる建物もあるし、パイプオルガンのあるホールだってあるのだ。

生活するのにも不便ということばは出ないし、音楽を高める上でも最高の環境が整っていると言っている。

「じゃあ、私いくから」

「おー、じゃあな瑞樹。終わったら電話な」

「Oui! (ウィ)」

主に学生の集まる練習棟とレッスンを受ける学生棟の真ん中でそれぞれの方向に分かれる二人。すこし早い時間に来たとはいえ、ふたりの様に早く来ている学生が居ないわけではない。盛大な注目を集めていることにそれでもふたりは気づいていなかった。

ふたりの父親の知り合い、というよりは親友がここの学長なのだ。壱が在学中に知り合い、今なお頻繁に連絡し合っている。今日

瑞樹が早く大学へきたのは学長に呼ばれているからだ。灼が早い時間にここへきたのはほとんどついだ。

練習棟に消える灼を横目でみつ、学長室へ急ぐ。

あまり学長室に出入りする姿を見られたくないがために、面会を申し出た学長――高原 湊人――に無理を言っこの時間にしてもらったのだ。

こんこん。

小気味よいノックの音が重厚そうな扉に響く。すこし滑稽だ。

「どうぞ」

「失礼します」

学長の秘書に取り次ぎをもらって中に学長室の中に入る瑞樹。ノックが聞こえた瞬間に、心底待ちわびたように輝いた笑顔を湊人が見せたことを瑞樹は知らない。

「瑞樹！ ああ久しぶりだね」

「うん、久しぶりですね」

その言葉を聞いて複雑そうに笑みを見せる湊人。御年三十九歳だが、まったく年齢を感じさせないそのルックス。せいぜい多く見積もっても三十代前半にしか見えない。

昔は敬語なんて使ってなかったのに、と頭の中で愚痴をこぼす湊人だが仕方がないと頭ではわかっているだろう。人間は分別をみにつける生き物なのだから。

座って、と湊人が瑞樹に促したと同時に彼の秘書が紅茶をもって入ってくる。アールグレーのいい香りが部屋を包み込んだ。

「で、瑞樹。早速本題だけれど……。本当にいいの？ 教師にも言わなくて。本当に Mizuki Dupont としてこの大学で学ぶつもり？」

「湊人おじさん？ 何回もいってるじゃない。人の口に戸は立てられないって。教師が知ってたら必ず広まるわ」

「うーん、それはそうなんだけどさあ」

彼女の才能を知っているからこそ湊人は心配なのである。それは彼女も重々承知しているのだが、そういう好機の目にさらされることにはある程度慣れていることを自負している彼女が折れることはない。

それに灼^{あつた}がさらされる視線の数に比べれば自分なんて足下にも及ばないだろう、と比較対象がいることも彼女が譲らない要因のひとつだ。

「大丈夫よ、湊人おじさん。私は平気。――じゃあ、行くね。……くれぐれも！ 公衆の面前で私を特別扱いなんてしないでね？ あ、でも、視線がないところではたまに優しくしてね！」

「ああ、任せておいて」

「ふふ、紅茶ごちそうさま」

無邪気に笑いながら出て行った瑞樹を思って、湊人は一口、紅茶を飲んだ。

独特のにおい、鼻に抜ける心地よいにおい。しかし頭にあるのはその心地よさでも拭えぬ、ひとつの不安。

最高の音楽教育を望める此処だからこそ、その不安は大きくなるばかりなのである。

「A tall tree catches much wind.
……僕は心配なんだよ、なんの後ろ盾もない君の才能が枯れてしま
うのではないかと」

けれど今は君の言葉を信じて、約束を守ろう。

——「私は平気」という言葉を。

そつと湊人は目をつむった。

騒ぐ人、騒がれる人

ざわざわ、そんな喧噪がまわりを包む。

なぜか。それは生徒が集まる時間帯だということもひとつの要因ではあるが、それだけではない。その中を歩く一人の少女というには大人すぎて、女性というにはまだ早い彼女が原因である。

決して彼女が有名だから、とかそのような理由ではない。

もっと滑稽でどうしようもない理由だ。彼女の見目があまりにも一目をひくというどうしようもない理由だ。

それだけでなく、彼女が電話を次々とかけているのも理由のひとつかもしれない。

少なくとも彼女が移動している間に四カ国語は彼女の口から登場している。奇しくもここは高原大学という日本音楽教育の最高峰である。どうしても音楽を目指す人たちは平均よりも収入豊かな家が比較的多いため、それなりに教育を受けてきたり、それなりに語学に興味をもって学んだ人が比較的多いのだ。だから彼女がしていることがいちいち理解できてしまう。

そんなちらちらという視線をまったく気にせずに、ヒールの音を鳴らして歩いて行く彼女はまた電話をかけたした。

「————、あ、灼^{あたら}？　んー、お話終わったよ。重ね重ね注意されただけど大丈夫って言うておいたわ。それより今どこにいるの？　レ

ッスン受ける前に灼のバイオリン聞きたいなあ」

今度は日本語で嬉々とはなす彼女をまわりは視線でちらちら追って行く。内容から相手がこの大学の人だという事はなんとなく分かる。まだ音楽に関するどんな技術も見せてはいないのに、すでに大きな噂を巻き起こしそうな彼女。

彼女が歩くとまわりが止まって見えるような錯覚さえ覚える。男子からは山の高い嶺に咲く可憐な花のごとく視線を向けられ、女子からは尊敬のまなざしで見られている瑞樹。そんな何のリスクもメリットも無いような視線にはとんと鈍感なため、ほとんどなにも気にしていない。

「げー、わかったよお。で？ J-1ってどこ？ オッケー、いまいくわ。じゃあね」

いままでずっとひっきりなしに電話をかけていた瑞樹がその携帯電話をバッグに滑り込ませたその瞬間、彼女の肩を二度とんとんと叩く人が居た。

「あの、どうも？ こんにちは」

「こんにちは。……なにか、ご用ですか？」

「私、一年ピアノの津田 菜々子っていうんですけれど。あなたは？ 一年ですよね？」

瑞樹は声をかけてきたその女の子を注意深く観察した。

害そうという気が彼女にあるならすぐにわかるためだ。隠していたってそういう類いの感情はすぐ表に出してしまうものだから。

じっと見極めるように視線を向けてきた瑞樹に、菜々子は首を傾げる。――と、なぜだか瑞樹をとりまく空気がほんのすこし緩んだ

気がして菜々子はにこりと笑った。

「瑞樹って言います。そう呼んでね。なにか？」

「ミズキさん、ですね。私のことは菜々子って呼んでね。それで私、すぐく田舎から来たからこの学校ってよくわからなくて、友達も居ないし不安だったの。それであなたのバッグから出てる楽譜をみてね？ あの子もピアノ科なんだって思って声をかけたの」

なるほど、と瑞樹は内心うなづく。

ピアノ科全員には入学時に共通課題が出されている。

——シヨパンのエチュード、通称別れの曲。穏やかな旋律と時折悲しげな表情を見え隠れさせるこの曲は、聞いた感じよりもはるかに弾く事は難しい。

ハンドバッグとは別に楽譜を持ち運ぶために瑞樹はクリアバッグを持っているためにその中にある楽譜は丸見えだ。おそらくそれを見てこの菜々子という子は瑞樹に声をかけてきたのだろう。

でも……、と瑞樹は考える。

この子が声をかけてきてくれたのは素直に嬉しいけれど、これから灼あらたの元へいくのにこの子がいては灼が嫌がるかもしれない……。ああでも田舎から来たって言ってたっけ。

灼はそれなりに有名なバイオリニストのため知っている人は知っているのだ。その中にはミーハー根性丸出しの人も少なくなく、そのため灼は親しい人以外とつきあうことを避ける傾向があるのだ。

「そっか……じゃあ、一緒にくる？」

「うん。よろしくね、ミズキ」

この高原大学は才能のある者を決して拒まない。
しかし逆に才能の無い者には決してその門戸を開く事は無い。
厳しい世界なのだ。

そんな高原大学には公にされていないが入学者数の定員が決まっていけないという事実がある。もちろん高校生向けの雑誌等には表向きの数字が書いてある。けれどこの数字はあまりにも意味をなさない。

極端に言えば願書を出した全員に才能があれば全員が合格だし、才能がなければ全員が不合格だ。

試験の課題も他の学校とはかなり異なり、難易度がかなり高い。そのかわり曲の選択肢はたくさんある。まあ用意されたどの曲を選んでも難易度はそうかわらないのだが、気休め程度に自分と相性の良い作曲家を選ぶ人が大半だ。

「ミズキは入試でどの曲を弾いたの？」

「……忘れちゃった」

「―――？」

そしてこれはかなりのトップシークレットなのだが。

高原が内々に声をかけた才能ある人はなんの試験も受けず、ただ願書を提出するだけで合格になるのだ。

瑞樹も灼もこの制度で入学しているため、瑞樹に試験の詳しい内容を知る機会は無かった。もちろん自分から調べようという気は皆無である。そのためこの話題に触れられると大変、困るのだ。

しかし“忘れちゃった”というのもおかしな話だろうに。

つい先日試験を終えて、ついこの間この大学に入学したばかりだ
というのに一年間苦勞して仕上げた曲のことを忘れるというのはあ
まりにも滑稽すぎる。

あいまいに菜々子に向けて笑顔を向けなんとかやり過ごそうとし
ているのは何ともいたいたしい。

「瑞樹？ 瑞樹じゃないの？」
「えっ？」

そこに突然声をかけてくる、ほどよく低く響く声。その声になん
となく聞き覚えがある瑞樹は勢い良く後ろを振り返った。

あ、と思ったときには遅かった。ああ、面倒臭いとあからさまに
顔に出ただろうことが確認しなくても分かってしまう。

「うわあ。葵……」
「やっぱり。久しぶりだね、瑞樹」

そこに立っていたのはかなり背の高い、男の人。

すこしダメージのきついジーンズに、黒いブーツ。上はライダー
スのジャケットに細身のサングラスをかけている彼のことは瑞樹も
よく知っている。

なんて言っただけで彼ほど有名な若手ピアニストはいない。おそら
く隣の菜々子さえ知っている。だって、彼女は固まったまま動かな
い。

幼少期から世界的に演奏活動を行い、作曲の分野でもこの若さに

して頭角を現している。彼がいることによって再び音楽に華やかな歴史が刻まれるだろうと数多の批評家たちに言わしめた、その才能。彼の名は、五鹿央いつかおう 葵あおい。

六歳にして英国女王陛下に招かれ彼女の前で演奏をし、八歳にしてピアノ協奏曲を書き上げた。

二百五十年前に神童といわれたモーツァルトよりも才能に溢れると讃えられる彼。人当たりもよく気さくだと言われる彼の「本当」を瑞樹は誰よりも知っているつもりだ。だからこそ感じるものがある。

「葵……面倒くさい」

「なにが？ 相変わらず変だね、瑞樹は」

私の荷物をさりげなく奪って腰に手を回す。すっかり慣れたこの扱いがまわりからどう見えるのかなんて、もう十二分に承知している。でも私がそれを嫌がることを知っていてこの男はやっているのだから、余計に質たちが悪い。しかし多く居る彼のまわりの“盲目人”もうもくびとは彼の容姿の力によってそれを感じないようなのだ。黒髪に黒目という日本人にとっては至って平凡な色合いでも、その一本通った鼻筋は西洋との混血をどこか彷彿させる。つまるところ、イケメンというフィルターが彼の悪行をすべて無効化しているのだ。

「で？ 瑞樹がここにいて事は灼もどうせ居るんでしょ？」

「——練習棟J-1だって」

「了解。……で？ あのおチビはどうするの？」

おチビ——？ ああ、菜々子かな？

「菜々子？ ついてこないならおいてっちゃうよ？」

葵に驚いて立ち尽くしている菜々子に向かって瑞樹は何も説明はしなかった。だって彼女には分^{みずき}かりきっている自明の理だ。面倒が待ち構えていることなんて。

グレーに微笑む

五鹿央いつかおう 葵あおい。

彼の実家はさかのぼれば平安以前までたどれるという、日本の礎となった家だ。それが彼の実家、五鹿央本家である。

葵は昔詳しいことを説明してくれようとしたが、ただならない面倒なおいを嗅ぎ取った瑞樹はそれを丁寧拒んだ。よって知っているのはこれだけだが、それだけでは済ますことの出来ない雰囲気が出ている、瑞樹にとっては”面倒”にカテゴライズされるなにかが必ずそこにあることを確信している。

そんな五鹿央家直系の、三男坊。

それが五鹿央 葵の素性。これだけでもすぐく面倒臭いの、さらに半端ものでない才能があるときた。そして性格は最悪。

瑞樹の出来る事なら顔を合わせたくないリストの上位五名には常にランクインしている。しかし何かにつけて瑞樹を追いかけて、灼を目の敵にする彼を心の底から憎む事が出来ないのはその境遇を瑞樹が理解しているからだろう。

その傍若無人な振る舞いが、言動が、どうして行われているのか。瑞樹や灼という親しい者以外を人として認めていないその言動――瑞樹の最悪という評価はここからくるのだが――を“面倒”と表現する以外に瑞樹がどうしようもない理由もまた、致し方ないことなのだ。

「おい、チビ」

「ち、チビ？ わ、わたしのこと…」

「そうだよ、チビ」

「葵、やめなさいって」

当然現在進行形で瑞樹のそばにいる菜々子にも、人としての扱いをしていない。

それはそれでもうしようがないと四分の三は諦めているの瑞樹だけれど、あまりにも目に余るときはそれなりに注意をしている。

『ところで、あなたなんでこの大学にいるのよ？』

『ああ、内々のお誘いがあったからだよ。理事長さんに聞いたからお前もあいつも居るって言うから』

いきなりのフランス語に菜々子は目を丸くしたが、瑞樹には声をかける前から、葵には登場した瞬間から驚かされっぱなしのためなんとなく慣れたというか、もしかしたらとんでもない人に声をかけたのかもしれないと感じ始めた菜々子である。その勘は限りなく間違っではおらず、今後の菜々子の身の振り方にも大きく影響するであろうことを彼女はまだ知らない。

『あなた本来なら講師側で来てもおかしくないでしょうに。まったく』

「それは瑞樹も一緒。そんなことしたら面倒なだけ。才能の乏しいやつに教えたって、大輪の花は咲かない。咲くのは野に咲く小さな野草の花だ」

野草、ねえ。と瑞樹はため息を漏らす。完全に菜々子に向けたで

あろうその言葉はわざと日本語にされたのだろうと容易に想像できる。しかし当の菜々子はきょとん顔で葵をみたため、葵はひそかに舌打ちをした。

嫌味が通じないというのはそれなりにむかつくことらしい。けれど嫌味で済んでいるあたり、それほど菜々子を嫌っては居ないんじゃないかと瑞樹は思っている。

と、一行が灼^{あらた}の居る練習棟のJ-1にやってくると、その周辺がざわりとしたがそんな事にはもう動じない。

さっさと練習室に入っていくとそこにはバイオリンを構えたままこちらを見ている灼がいた。

「ああ、やけに騒がしいと思ったら葵も一緒だったのか。よお」
「ああ、久しぶりだな」

そのあと灼は菜々子に一瞥をくれたがそれ以外何の興味を示さず、瑞樹に向き直る。そして軽く包容したあとに椅子を彼女に勧めた。

瑞樹は各練習室にあるピアノの椅子に腰掛け、それをみた菜々子は近くにあったパイプ椅子に腰かけた。葵はそんな瑞樹をいとおしそうに見つめるだけ。

なんとも不可思議な光景である。

「瑞樹、リクエストは？」

「特になし。あー、……じゃあ葵とジャズの即興セッションなんて。——だめ？」

思いついたように言葉を吐いて自分をみてる瑞樹に、灼は緩んだ笑みを浮かべて「俺はいいけど」と挑戦的に葵を見やった。

その挑発に瑞樹曰く面倒な葵が乗らないはずがないわけで、なんとも面白い組み合わせのセッションが始まろうとしていた。

「俺が終わったらあのチビが灼と、その後は瑞樹と灼な。これでフエアだろ？」

「わー、おもしろそう。」

「瑞樹、棒読みだぞ？ 大丈夫か？」

「わたし、私ですか？ どどうしよう」

「チビはチビなりにチビな演奏をすれば良い。所詮チビだ」

世界の音楽マニアがこの場に居合わせたならおそらく卒倒するくらいに豪華な顔合わせなのは間違いない。

そしてジャズという個性が強く出るだろう選択もなかなか良いものだ。しかしそういう音楽だからこそ、個を知らなければ合わせづらいというやつで。

「で、その“チビ”さんのお名前は？」

半分仕方なく、といった風に灼が菜々子に向かって名前を聞いた。――余談だが、葵が全員とセッションという面倒な事を言い出すということを見越し、さらに互いに良い演奏をするために打ち解けようとする灼を見抜いての、「……じゃあ葵とジャズの即興セッションなんて。――だめ？」という瑞樹の言葉だったことは誰も知らない。いいようにころころと瑞樹の手のひらで全員転がされているのだ。

「私は津田 菜々子といいます。一年ピアノ科です」

「なんだ。全員同い年か。俺は神山 灼こうやま あらた、一年バイオリンだ。よろしく」

そのとき菜々子は気づいたのだ。

まっすぐに菜々子を見てくる目の前の灼の瞳の色が、瑞樹と同じ

である事に。

そう、オリーブみたいなその色に、なぜか強烈な既視感を覚えると同時に違和感も感じた。

けれどこの場で言わないということは触れてほしくないのだと菜々子は理解し、差し出された手を握ってあいまいに笑った。

こぼれた水から

即席セッション一組目はだいたい瑞樹が想像した通りだった。

最初の葵と灼はもはやジャズじゃないという具合の荒くてがちがちの、なんだかケンカをしているみたいなの、そんな感じ。

でもあとから決めた二分弱という時間制限いっぱいまで演奏したところを見ると、それなりに二人も楽しんだようで、その証拠に後半はごく楽しい掛け合いが面白かった。

さすが葵、と言わしめる即興でありながらの超絶技巧に瑞樹も大満足だった。

「――まあまあだな、灼」

「そりゃどーも。しかし、俺はあと二回やんなきゃなんないのにこんなに体力削りやがって、わざとだな、お前！」

「あたりまえだろう。俺が超絶技巧をやってお前が何もしななんて、バランスが取れんからな」

「ひでえ」

終わったあとのその会話を聞いて瑞樹はなんとなく安心した。二人ともその才能から年相応に振る舞う事なんてほとんどない、だから二人ともが互いに対等な関係で居られることはとても貴重で、彼らにとっては必要なことなのだ。

これから成長して行く上でも、これから互いに高め合うためにも。

——そして、新たな出会いもまた必要なのである。

「じゃ、次はチビと灼、やれよ」

「はいはい、わかったってば」

「あ、じゃあよろしく願います、灼さん」

うー、と首を回したあとに灼は菜々子に向き直る。そして至極真面目な顔をしながら、彼女に質問をした。

「菜々子さん、……好きな作曲家は？」

「えっ……り、リムスキー・コルサコフ——」

彼女が言い終わるか終わらないかその微妙なラインで灼は侵入する、彼女の世界に。最初は低いトーンから始める、徐々に重音になり、不協ともとれる音を奏で出すが、よくよく聞けばそれがひとつの旋律なんだとわかる。

そんな低いところから一体どうやって組み立てて行くのかと興味をひかれ、聞けば、ぽん、っとそのまま旋律をピアノに丸投げする。

バイオリンの低音域からのピアノへの移行、その新しい出会いを菜々子は殺してしまわないようにけれど大胆に高音と絡める。

菜々子の組み立てる音楽を予測して灼が絶妙な間の手を差し伸べ、かと思いきやどんどん高みへ追いつめる。そして叫び——。

瑞樹は来る、と思った。フィニッシュが、灼の手によって作られたフィニッシュが。

そして上った高みからの、転落。

超高音域からのピアノによるグリッサンド。フィニッシュはC^{ツェー}の

音。

「灼、菜々子！ よかったよ」

「あ、ありがとうございます、灼さん」

「いえ、こちらこそ」

無言でムスリとしている葵は放っておいて、瑞樹は感じたことを述べる。

「リムスキー・コルサコフ、って言われたらねえ。ああ始まるしかないわよね、灼？」

「ああ、最初の低温域はあの有名な熊蜂の飛行からインスピレーションでアレンジだな」

「……………そうだったんですか。私もう、無我夢中で——」

「ほら、次は瑞樹の番だろう。チビは引っ込んで。邪魔だ」

その葵の苛々した物言いに菜々子はしよげてハイといい、瑞樹と灼は互いに顔を見合わせてじゃあ、と位置につく。

瑞樹の椅子の高さ調節の間に灼はピアノを使って軽いチューニングを行う。ピアノから出るA^{アイ}の音と、灼のバイオリンが出すAの音が共鳴する。

それが終わったと同時に瑞樹もしっかりと椅子につき、にっこりとわらう。

ふたりとも互いに息を吐き、——

「「じゃんけん、ぽん！」」

真剣にじゃんけんをした。その光景はたしかに少し滑稽だが、そ

れでも彼らにふざけている気持ちは一ミリもない。

「やったー、私勝ち！ 灼負け！」

「くそ、ほら瑞樹？ はやく言え！」

「んー、じゃあ。今日の気分はA^{アドウア}durかな。OK？」

「OK, I'm ready. ——— One, two, three!!」

その瞬間C^{チス}＃の音からはねるように始まるピアノの旋律。至極明るいその音に灼はピッチカートを使いつつ応える。

音階を駆け上がりながら、と思えば滑るように落ちていく瑞樹の指。その楽しそうな旋律は聞いている側も心浮たつような、そんな音色だ。

旋律が灼に入れ替わり、一見投げやりに聞こえるけれど規則的なそれに瑞樹は左手で間の手をいれ、右手でそれを追いかける。時たまわざと音を外して遊び心も忘れない。しかしその外れた音があることによって他の音の良さが際立つ。そしてアイコンタクト、1、2、3、4、示し合わせたその瞬間に音が消えて、行ったり来たりする瑞樹の可愛い旋律とそれを抱きしめるような灼の低音の旋律。くみ合わさってひとつの和音になる。

目を合わせた瑞樹と灼、絶妙なリズムで四音。はねて消えるようなフィニッシュを飾る。

終わった瞬間に立ち上がり、互いにハグをする瑞樹と灼に葵はふん、と鼻をならす。それは二人を認めている証拠で、葵がそれをするのは至極珍しい事なのだ。

「まあ、よかったんじゃないか？ 即興の割にはちゃんと組み立てがされていたしな」

「うるせーよ、葵！ お前なんか全部ぶちこわしてひいてたくせに」

たしかに葵のものいいは限りなく上から目線ではあるが、それにはマイナスな感情は一切含まれていないため灼も口では文句を言いつつも喜んでいた。

瑞樹もそれをみて笑っていたのだが、しかし視界の端にいる菜々子の様子がおかしいことに気づいた。

「……菜々子？ どうかした？」

「あつ、――や、なんでもないで」

「……、どうせ灼と瑞樹のテクニクにビビったんだろう？ これを聞いてたらさっき自分が弾いた即興がお粗末なものに聞こえるよなあ？ そりゃそうだろう。比べるまでもないし。――ああ、それから良い事を教えてやろう。さっきの灼とお前のセッションは、お前はただ弾かされてたんだ。お前は一ミリだって自分で弾いちゃいない。全部灼に操作されて、あいつが意図したように作らされてたんだよ。まったく、それなのに……――」

葵の愚痴はまだまだ続いていたが、菜々子はそれ以上を聞けなかった。

ごめんなさい、と呟いてこの部屋から出て行ったためだ。

せっかく“才能ある者しか入れない”といわれる高原大学の、花形のひとつであるピアノ科に入学出来たのに。そこで思い知らされる、歴然とした実力の差。

菜々子は葵と自分を比べるほど奢ってはいなかった。

なんていったって、あの五鹿央 葵なのである。コンサートを開けばチケットは五分で完売、オークションにチケットが出たならその値は十万にまでつり上がることも稀じゃない。クラシックファンが一生に一度は生演奏を聞きたいとおもう、彼。世界的にも有名で、

指揮、ピアノ、作曲と幅広い才能をもつ彼と自分を比べるなんて。

だからひそかに瑞樹と自分を比べてみようなんて、おもっていた。けれどそれはある意味では無駄なことだった。

即興の完成度、音色、技術、どれをとっても菜々子は瑞樹に勝っていなかった。それに愕然としていたところに、葵の追い打ち。そして自分と灼とで作った気になっていた、あのセッション。まさか弾かされていたなんて、と涙がこぼれた。

さっきの練習室から逃げ走る最中、菜々子は泣きながら呟いた。

「——っ、笑っちゃ、うよね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1289o/>

片羽の蝶々

2010年11月7日20時33分発行